企画展

『メディアに見る 明治 43 年の東京大水害』

今から 100 年前の明治 43 年（1910）、関東を大水害が襲いました。荒川や利根川は８月上旬から激しい降雨に見舞われたために氾濫し、荒川の流域である埼玉や東京は大きな被害を受けました。

この水害については、当時撮影された写真などが数多く残されており、被害の状況や水害の恐ろしさを現在に伝えています。本企画展は、明治 43 年当時の写真や絵葉書を活用し、東京を襲った大水害の様子を紹介するものです。写真は、人の命や財産が危機に瀕した水害直後のものから、水が引きはじめ、人々の安堵の様子がうかがえる写真まで、様々なものを取り上げています。

この企画展以外にも『東京･埼玉大水害 100 周年記念講演会実行委員会』では、下記の講演会も企画しております。こちらにつきましても、多くの方々にご参加いただけることをお待ちしております。

第 2 回講演会

日時：平成 22 年 8 月 1 日（日） 13：00 ～

会場：東京都北区 荒川知水資料館 アモアホール（赤羽駅から徒歩 15 分程度）

内容：**メディアに見る明治 43 年の東京大水害**

（講師：北区史を考える会　領塚 正浩 氏）

ほか、岩淵水門、荒川知水資料館見学など

第 3 回講演会

日時：平成 22 年 9 月 15 日（水） 18：30 ～ 20：30

会場：東京都足立区 シアター１０１０（北千住マルイ 11 階・北千住駅４番出口直結）

講演者：**高嶋 哲夫 氏（作家）**

講演者紹介

科学技術の先端知識を駆使したエンターテイメント作品を精力的に執筆している。

2007 年には著書『ミッドナイトイーグル』が映画化される。海外でも翻訳出版されている著書も多数ある。2008 年には東京大水害をテーマとした『ジェミニの方舟 東京大水害』を執筆し、大都市を襲う水害の恐ろしさと家族の絆を描く。

第 4 回講演会

日時：平成 22 年 10 月 24 日（日） ※時間・内容は検討中

会場：東京都江戸川区 江戸川区総合文化センター（新小岩駅南口より 徒歩 15 分）

講演者：**宮村 忠 氏（関東学院大学名誉教授）**

主催：東京・埼玉大水害 100 周年記念講演会実行委員会

（NPO 法人あらかわ学会　北区史を考える会　NPO 法人ア！安全・快適街づくり）

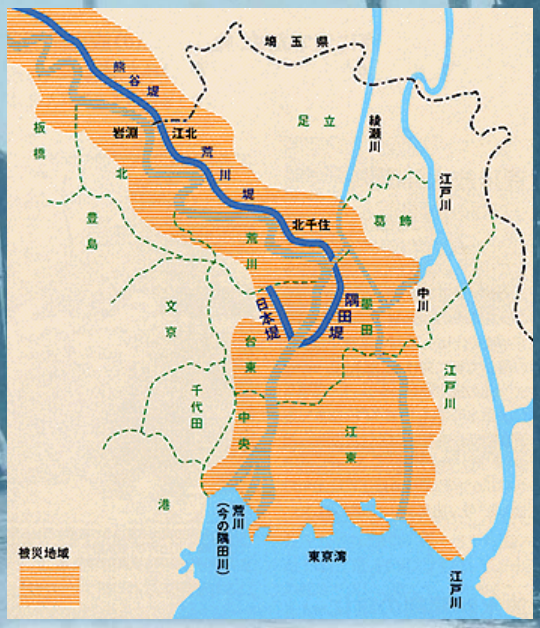
明治 43 年の東京大水害

江戸幕府は、関東平野の治水事業の一環として荒川の流路を変え、「伊奈流」あるいは「関東流」と呼ばれる手法で、荒川左岸に熊谷堤・荒川堤・隅田堤、右岸に日本堤などの堤防を築いた。その結果、荒川の中・下流域は江戸市中を水害から守るための大規模な調整池と化し、流域の人びとは、しばしば水害に悩まされることになったのである。

明治時代に入り、日本の政治・経済は大きく変化したが、江戸時代以来の治水政策は、そのまま継承されたため、荒川流域は、毎年のようにおこる水害に悩まされ続けていた。そして、明治 43(1910) 年の夏を迎える。この年は、8 月 1 日から長雨が続いた上、8 日から 11 日にかけて激しい降雨となったため、荒川中・下流域の堤防が各所で決壊し、寛保 2 年 (1742)、天明 6 年 (1786) 以来の大水害となった。全国的にも大水害が頻発した年であったが、従来の水害と比較して規模が格段に大きく、水が引くまでに 3 週間以上もかかった地域もあった。

臨時水害救済会の報告書によると、荒川下流域（東京）の被害は、死者 45 人、負傷者 117 人、不明者 7 人家屋全壊 87 戸、半壊 179 戸、流出家屋 94 戸、浸水家屋 16 万 7410 戸に及んでいる。荒川知水資料館に近い北区岩淵付近では、この時の荒川の水位が 8 メートル前後も上昇し、濁流は台地直下の鉄道線路沿いにも達し、北区域の低地部は、瞬く間に水没してしまったのである。8 月 13 日発行の『東京朝日新聞』によると、王子付近では工場の煙突が水上にそびえ、屋根だけが見える家屋の間を船や筏が往来し、飛鳥山には出水観覧者が押し寄せたと記されている。また、赤羽付近では、警察と赤羽工兵隊が出動し、埼玉方面からの流失家屋 5 戸を取り押さえ、漂流者 150 人を救助したとも記されている。

北区域より下流の千住・三河島・向島方面では、自宅が軒下近くまで水没し、天井を突き破って屋根上に脱出したり、助けを求める人びとが続出した。また、隅田堤（向島堤）・日本堤・荒川堤・寺社・小中学校・上野公園・国技館などに避難する人々が殺到し、炊き出しなどによって、食料や飲料水が供与された。こうした人びとの救助には、警察･軍隊･役所はもとより、寺院・赤十字・新聞社・漁業組合（救護船）の救護隊が大活躍したが、水害規模の割に人的被害が少なかったのは、毎年のようにおこる水害に対し、関係機関の担当者や地域住の心構えができていたからであろう。



明治 43 年の大洪水（荒川下流の様子）

［出典：荒川下流河川事務所ホームページ］

	人（人）			家屋（戸）			
	死　者	負傷者	不　明	全　壊	半　壊	流　失	浸　水
東　京	45	117	7	87	179	94	167, 410
埼　玉	323	77		627	548	1, 052	84, 538
群　馬	292	146	22	631	652	888	31, 727
茨　城	24	26		361	576	662	20, 235
栃　木	12	16		189	199	210	27, 577
千　葉	77	46	1	359	316	266	13, 195
神奈川	37	25	2	45	94	75	14, 601

関東地方の被災状況

絵葉書に見る水害の様子

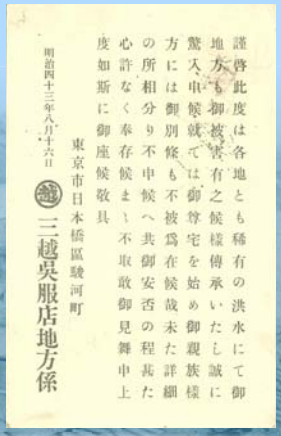
明治 43(1910) 年の大水害については、膨大な数の映像が残されており、当時の様子を詳細に知ることができる。これらの映像は、写真機の普及にともない絵葉書・雑誌・新聞などのメディアに残されたもので、その数は従来の水害と比較して群を抜いている。

今回の展示では、普及して間もない絵葉書から多数の映像を紹介するが、これらは水害の発生直後に印刷・販売されたもので、購入者の手で一文が記されると、瞬く間に被災地から日本各地に配達された。8 月上旬の水害の様子は、すぐさま写真入りの絵葉書となって販売され、下旬には日本各地に配達されたのである。東京在住者には、地方出身者の占める割合が高いこともあり、自分の身近でおこった惨事を逸早く家族・親類をはじめ、親しい知人に伝える必要があった。電話が高価で貴重品であった時代、絵葉書は庶民にとって、最も安価で確実な情報伝達の手段であったが、購入者が多く入手が容易でないこともあったようである。

当時の絵葉書は、古書市場などにも数多く出回っており、そのことを裏付けるように、東京から地方に配達されたものが見受けられる。また、これとは別に下記のように商売上の理由から水害見舞いの葉書（印刷）を出す商店や個人などもあり、その素早い対応には驚かされる。

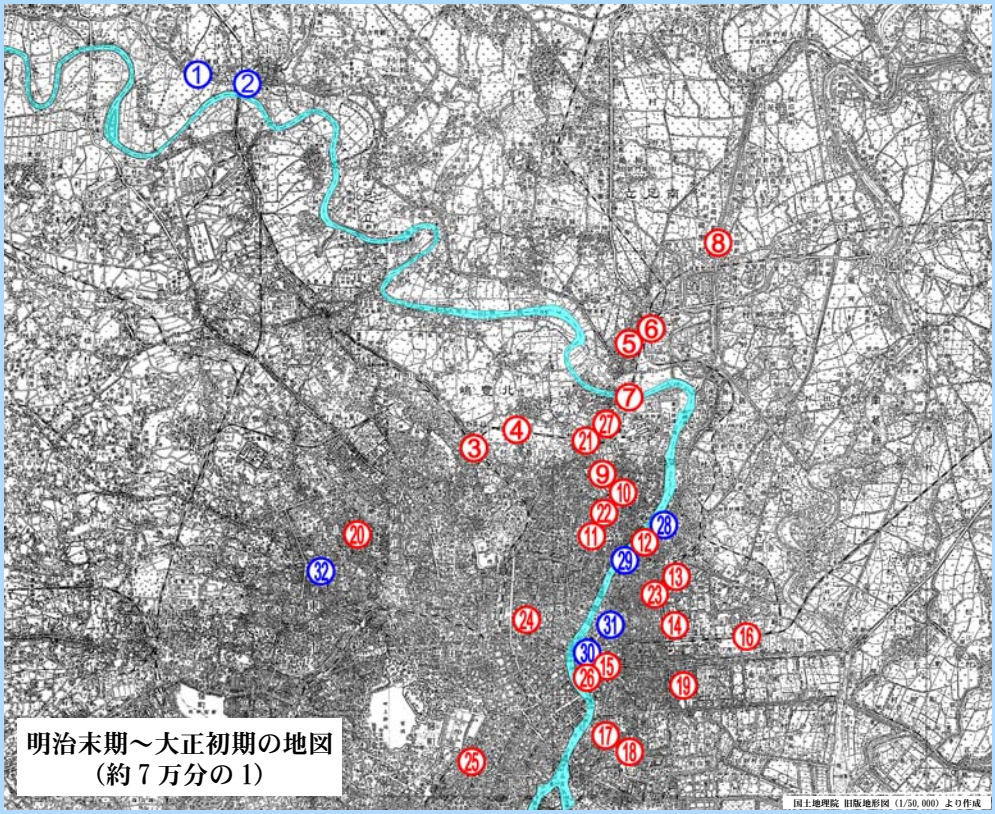
水害直後に販売されていた袋入りの絵葉書

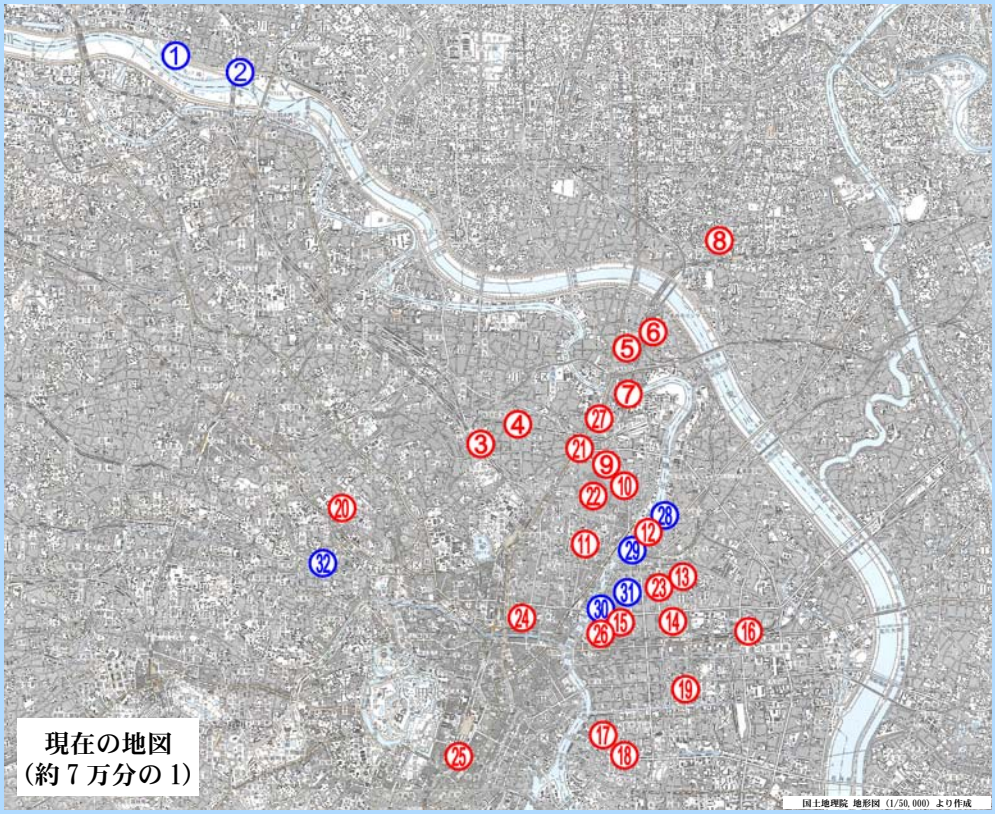
『東京市内大洪水紀念帖十二景』（絵葉書）



（左）画家の亀田雲鵬氏が長崎の知人に宛てた肉筆の絵葉書
（右）三越が得意先に宛てた水害見舞いの葉書
［出典：『絵葉書』］

写真撮影地点位置図





凡例

丸数字はパネルに掲載した写真左肩に付した丸数字に対応。

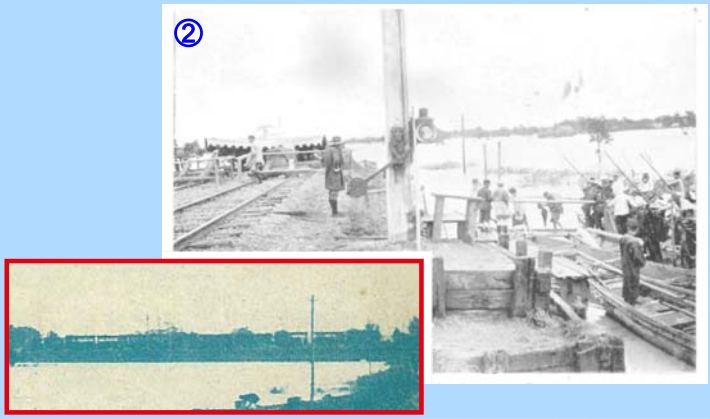
丸数字（赤）・・・古写真のみ

丸数字（青）・・・古写真と現況の比較あり

パノラマ写真から見る
水害当時の川口周辺地域

下のパノラマ写真は、荒川左岸の堤防の上から下流に向かって撮影されたものである。写真の通り、写真左側に写る川口町一帯は水没してしまっている。

写真右側には荒川鉄橋が写っているのが確認できるが、そこから左に目を移すと、堤防のすぐ横に汽車が停車している様子がかすかに写っている。当時，川口方面の水没により鉄道が普通となったため、ここに渡船場を設けて次の蕨駅まで船で 3 時間かけて乗客を送迎したという。ここに写る汽車は、そのために停車しているものと思われる。



（下）停車中の汽車（パノラマ写真より拡大）［出典：『グラヒック』］
（上）荒川鉄橋の川口側から北東方向を望む［出典：『写真タイムス』］

現在の JR 荒川鉄橋川口側から北東方向を望んだ写真

大正初期の川口周辺地形図
［出典：国土地理院旧版地形図 大正 8 年発行］

番号 1：パノラマ写真の撮影地点と撮影方向（推定）
番号 2：連絡渡船場の写真の撮影地点と撮影方向（推定）

現在の川口周辺地形図
［出典：国土地理院地形図 平成 16 年］

写真で見る水害の様子

千住方面

日暮里駅付近の鉄道線路から北方を望む

［出典：『絵葉書』］

JR 日暮里駅付近も当時は田園地帯であった。

三河島駅付近の様子

［出典：『絵葉書』］

列車内に一時避難する人びと。ホームには避難する人びとの荷物が見える。

千住付近の浸水状況

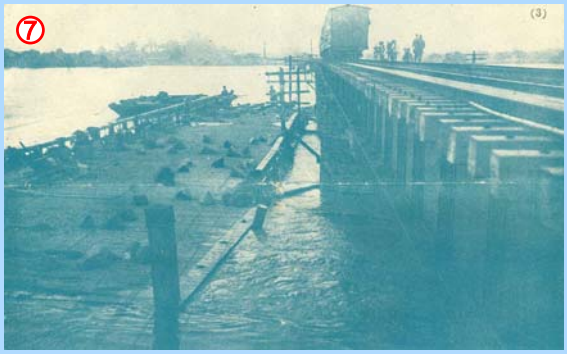
［出典：『絵葉書』］

1 階部分が完全に水没しており、軒先の看板が水上に見える。旧千住宿付近の商店街であろうか。

北千住駅付近で待機する看護婦

［出典：『写真タイムス』］

災害規模からすると貢献度は低かったが、官民一体の救護活動には見習うべき点が多い。



千住鉄橋の様子

［出典：『グラヒック』］

千住鉄橋脇に流出した千住新開橋が繋留されている。

綾瀬川の堤防決壊

［出典：『写真タイムス』］

現在の足立区から隅田川に注いでいた綾瀬川の堤防が決壊した。現在は、荒川放水路（現荒川）で分断されているため、綾瀬川は隅田川には注いでいない。

写真で見る水害の様子

浅草・隅田方面

日本堤上に避難する人びと

［出典：『絵葉書』］

日本堤・荒川堤・向島堤などの高所には避難する人びとが殺到した。日本堤は、荒川放水路の完成によりその役目を終え、後に削られて平地となった。

日本堤上に設営された臨時の給水所

［出典：『絵葉書』］

消火栓を利用した給水所が設営され、避難する人びとに飲料水が供与された。

浅草公園付近の浸水状況

［出典：『絵葉書』］

浅草公園西側の道路から北方の凌雲閣を望む。凌雲閣は、その後の関東大震災で崩壊した。

隅田堤（向島堤）の決壊と修復作業

［出典：『絵葉書』］

現在の北区にあった赤羽工兵隊が決壊した堤防の修復にあたった。

女性や子どもたちを乗せた救助船

［出典：『絵葉書』］

現在の墨田区業平１丁目･横川１丁目･東駒形３丁目付近の様子。避難所へ向かう途中の一コマであろう。

水没した家屋の屋上に避難する人びと

［出典：『絵葉書』］

現在の JR 錦糸町駅に近い墨田区太平１･２丁目または錦糸１～３丁目付近の様子。

写真で見る水害の様子

両国・江東方面

旧両国国技館内に避難する人びと

［出典：『絵葉書』］

旧両国国技館は最大の避難先となり、避難してきた人びとであふれた。歳代 8,000 人が収容された。

現在の JR 亀戸駅付近に避難する畜牛（現江東区）

［出典：『写真タイムス』］

JR 亀戸駅周辺には、牧畜業を営む人びとたちがいた。小説家の伊藤左千夫もその一人であり、この時の水害の様子を『水害雑録』という作品にまとめている。

現在の江東区深川で郵便を集配する木造船

［出典：『グラヒック』］

水上を移動して郵便物を集配する便利な木造船も初登場し大活躍した。

タライ舟で遊ぶ子どもたち（江東区深川付近）

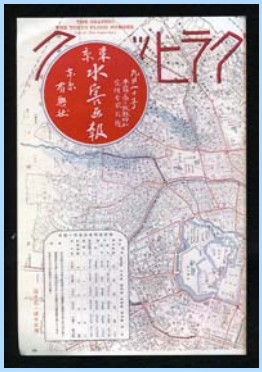
［出典：『絵葉書』］

タライは荷物の運搬に役立ったが、水害が一段落すると、子どもたちの遊び道具にもなった。

現在の江東区猿江で火災にあった家屋

［出典：『写真タイムス』］

点火したマッチが水上の石油に引火し、一家 7 人が焼死する火災が発生した。



『グラヒック』9 月 1 日号 東京水害画報

※田中源三郎編（1910）有楽社刊より

『グラヒック』の撮影隊

カメラマン（右）と助手（左）

写真で見る水害の様子

その他の地域

現在の文京区内で発生した崖崩れ

［出典：『写真タイムス』］

文京区小石川４丁目付近で発生した崖崩れ。各所で同様の崖崩れが発生した。

現在の台東区・墨田区等における被災後の様子

［出典：『写真タイムス』］

後片付けに追われる被災地。伝染病予防の消毒作業が不可欠であった。（左上の写真は大森（大田区））

三井慈善病院に収容された人びと

［出典：『写真タイムス』］

三井慈善病院は、現在の三井記念病院の前身であり、水害時には救護隊が出動して病気の人びとの救助に当たった。

慰問袋に菓子を詰める人びと

［出典：『絵葉書』］

報知新聞社内で被災した人びとに配る菓子の袋詰め作業をしている。

近衛兵による炊き出しの様子

［出典：『絵葉書』］

各地でこのような炊き出しがおこなわれ、お米のおにぎりが配られた。

歩兵隊による救助

［出典：『グラヒック』］

救助鉄船は各地から集められたようである。

※写真の撮影地点に関し、写真㉕については当時の報知新聞社本社社屋と判断した。写真㉖については、『災害記念絵葉書集　絵葉書が伝えた災害の記録』（利根川上流工事事務所、2000 年７月）を参考とした。

パノラマ写真で比較する荒川の今昔

明治 43 年 8 月 14 日の荒川の様子

荒川の堤防上から東方の荒川鉄橋を望む（現埼玉県川口市）

［出典：『グラヒック』］

現在の埼玉県川口市飯原町付近の荒川堤防上から荒川鉄橋を望む。鉄橋を渡ったの川口側には列車が停車しており、堤防の左側には魚採り？をする人の姿が見える。

現在の荒川の様子（平成 22 年 5 月撮影）

明治 43 年とほぼ同じ場所からの風景

当時より堤防は高くなり、二階建ての家が堤防の下に見える。川口駅側には高層マンションが建ちならんでいる。

撮影された水害箇所の今昔

隅田・両国方面

三囲神社付近の浸水状況

［出典：『絵葉書』］

墨田区向島２丁目にある三囲神社の参道の浸水状況。

現在の三囲神社

吾妻橋付近の浸水状況

［出典：『絵葉書』］

現在のアサヒビール吾妻橋ビル前から見た吾妻橋付近の様子。

現在の吾妻橋付近

旧両国国技館前の炊き出し風景

［出典：『絵葉書』］

明治 42(1909) 年に完成した旧両国国技館前の炊き出し風景。同館は、墨田区両国２丁目にある回向院の東側に隣接する場所にあった。

現在の旧両国国技館前

撮影された水害箇所の今昔

江東方面

水中を歩いて移動する大勢の人びと

［出典：『絵葉書』］

現在の JR 総武線付近の清澄通りは避難したり、水害見舞いをする人びとであふれた。今後起こるかもしれない大水害の時には、おそらく同様の光景を目にすることになろう。

現在の本所亀沢町

その他地域

神田川に架かる石切橋付近の浸水状況

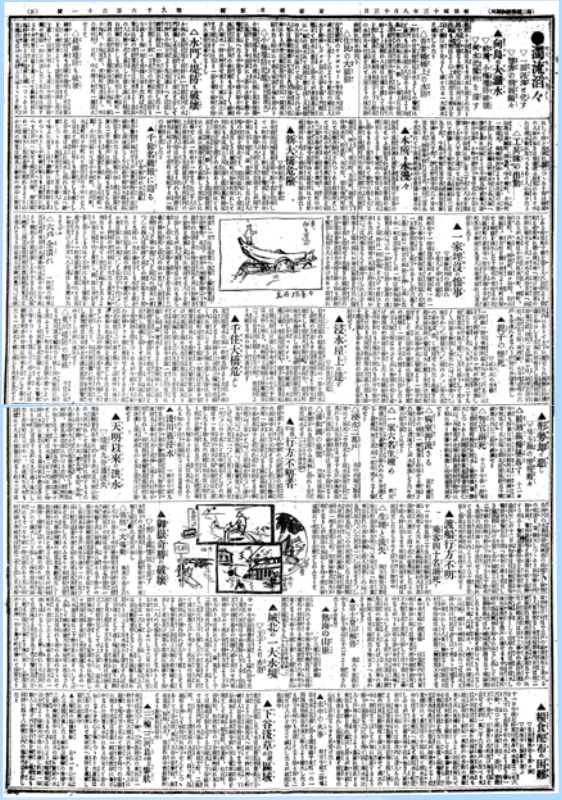
［出典：『写真タイムス』］

新宿区と文京区に跨る石切橋付近の様子。当時、神田川は「江戸川」と呼ばれていた。

現在の石切橋付近

新聞・雑誌に見る水害の様子

明治 43（1910）年の大水害は、絵葉書だけでなく、新聞や雑誌にも映像や記録が数多く残されている。当時の新聞は、毎日のように水害の様子を報じており、荒川流域の被災状況はもちろんのこと、利根川や江戸川流域の被災状況、全国各地の被災状況と治水対策などが紙面を賑わせた。また、『風俗画報』『グラヒック』『写真タイムス』などを発行していた当時の雑誌社が水害特集号を逸早く編集・刊行し、水害の様子が詳細にわかる冊子を後世に残してくれたことも、今回の展示をおこなう上で大いに役立った。『風俗画報』は、新聞記事を集約して水害の様子を詳細にまとめているし、『グラヒック』は東京付近の水害の様子を詳細に紹介している。『グラヒック』を刊行する有楽社は、この時の水害を取材するための撮影隊を組織して東京の被災地を巡回し、写真だけでなく挿絵入りの特集号を世に出している。『写真タイムス』も多数の写真で水害の実態を明らかにしている。当時の雑誌には、大水害の様子を和歌に詠んだ作品なども見受けられ、当時の人びとの水害に対する思いを知ることができる。



水害を報じた新聞記事
［出典：東京朝日新聞 明治43年8月13日号］

『写真タイムス』第 20 号
臨時増刊大洪水号
※川田佐門次編（1910）明治製版所より

『風俗画報』第 412 号
水害号 上
※田中市之助編（1910）東陽堂より

洪水のうた　村上登子

ゆきかひのしげき都の町中を川の如くに水よせきたる
百年のむかし語りをまのあたり都の町に水はあふれぬ
いで水に家の軒さへかくろへるなかを舟こぎ人たすけ居り
をさな子をせおひしままに舟にのり出水の町をのがれゆく人
いで水に家も庭木もひたされし中を吹けり秋の初かぜ

大水害は忘れた頃にやって来る

明治 43(1910) 年の大水害が契機となり、明治政府は、荒川の大規模な改修工事を決する。同年 10 月、臨時治水調査会は、当面事業に着手すべき第一期施行河川に荒川（下流域）を選定し、翌年から事業がはじまった。大正 13 (1924) 年に岩淵水門、昭和 5(1930) 年に荒川放水路が完成し、ようやく改修工事は一段落した。こうして現在の荒川流域の治水システムの基礎ができあがったのである。荒川の改修工事は、その後は中流域にも範囲を広げて継続され、今日に至っている。

大水害は、何時また私たちが暮らす荒川流域を襲って来るかわからない。荒川流域は、100 年前とは比較にならないほど人口が増加し、市街化が進行していることから、ひとたび起これば、その被害は私たちの想像をはるかに絶するものとなろう。地球温暖化にともなう異常気象とそれがもたらす大水害の可能性が危惧され、水害に対する危機管理が問題となっている昨今、行政の治水政策に依存するだけでなく、私たち自身も水害に関心を持ち、対策を考えてみる必要があるのではなかろうか。今回の展示がそのための契機となれば幸いである。

平成 22（2010）年 7 月
東京・埼玉大水害 100 周年記念講演会実行委員会